

ラテン語受容史における切支丹屋敷

Latin Language and Kirishitan Yashiki

泰田 伊知朗

Ichiro TAIDA

[要旨]

江戸時代に、現在の東京都文京区小日向に切支丹屋敷と呼ばれる館が存在した。そこには捕われた西洋人宣教師たちが収容されていた。本稿では、この屋敷に関わる人々が携わったラテン語受容に焦点を当てる。とくに切支丹屋敷を設立した井上筑後守正重、そこに収監されたジョバンニ・バッティスタ・シドッチ、彼を取り調べた新井白石、その尋問で通訳を務めた今村源右衛門、今村にラテン語の手解きをしたアドリアーン・ダウを取り上げたい。この屋敷が建設された目的はキリスト教という西洋文化の流入を防ぐことにあったが、皮肉なことにそこに関わった人々によって、ラテン語という西洋文化の根源を支える言語が受容されたのである。

[キーワード]

ラテン語、受容史、西洋古典受容、切支丹屋敷、井上正重、シドッチ、今村源右衛門、新井白石、オランダ商館日記、西洋紀聞

はじめに

日本におけるラテン語受容の先駆けは、16世紀後半に始まったイエズス会によるラテン語教育であるが、その後の禁教令、鎖国政策のなかでその受容も衰退する。だが8代将軍吉宗（在位1716-45）以降蘭学が勃興し、蘭学者のなかにはラテン語に取り組む者もいた¹。そして明治に入ってから本格的な受容が再開された。

このようにキリスト教排斥が徹底的に行われるようになった17世紀前半から、蘭学者の活躍が始まる18世紀後半までの間はラテン語受容の空白期と言える。だがその時期にわずかではあるがラテン語受容の痕跡が窺える。当時、受容に携わった人々の人生が交差したのが、現在の東京都文京区小日向にあった切支丹屋敷である。

本稿ではこの切支丹屋敷に関わった複数の人々がラテン語受容に貢献したことを論じ、その受容史の空白の部分埋めていきたい。

井上正重と切支丹屋敷

切支丹屋敷は1646年に建てられた²。ここは本来、大目付の井上筑後守正重の山屋敷（別荘。下

屋敷とも呼ばれる)だった³。彼は遠江、横須賀の領主大須賀康高の家臣、井上半右衛門尉清秀の四男として1585年に生まれ、1608年23歳のとき徳川秀忠に仕え、御書院番となった⁴。そして島原の乱(1637-8)で重責を果たしたことで、1640年に下総国高岡藩の大名となり、初の宗門改役に任命される⁵。彼はキリスト教徒を棄教させる術を心得ており、それ以降多くの転向者が生まれた⁶。

1643年に宣教師ペトロ・マルクエズら10人が筑前(現在の福岡県の北西部)に上陸し、捕えられた⁷。当初、捕われた宣教師は日本橋の小伝馬町の牢屋に入れられていた。しかしそれでは幽囚されている他の人がキリスト教に改宗するという問題が生じる。そこで井上は自分の屋敷に宣教師を幽閉し、時間をかけて説得することにした⁸。

こうして1646年に建てられたのが切支丹屋敷である。当初は便宜上キリシタンたちを収容し糾明していたのを徐々に拡張して、事務所と共に牢屋(または収容所)を作り、それに高塀を廻らした⁹。

井上正重とラテン語の辞書

さて井上の人物像について、岩生成一は次のように述べる。「このキリシタン弾圧のエキスパートは、もとキリシタンであり、キリシタンの教義や慣習を熟知していて、四十歳で改宗してその弾圧に凄腕をふるった人物である。オランダ人たちの処遇についても、筑後守の知識と立案がかならずやその背後にあったことであろう。なおこの人物は、皮肉なことにたいへんハイカラであった。洋服を着用し、西洋風の料理を好んだといわれ、オランダ人にチーズや葡萄酒を提供することをしばしば要求したそうである」¹⁰。

元キリシタンという点に関しては遠藤・三浦は疑問を投げかけているが¹¹、井上が西洋事情や情報の摂取に力を入れていたことなどから、彼は西洋文化への造詣が深かったと考えられる¹²。

井上は西洋からの知識を得るために、長崎に滞在するオランダ人に政治的な圧力をかけ情報を引き出したり、江戸にいたオランダ人医師に質問したり、拝礼のために江戸にやってきたオランダ商館長を家に招いたりしている¹³。例えば1642年1月16日付の日記によると、江戸に到着した商館長エルセラックは井上の書記官より、「四、五日中に陛下の御前に出る準備をするように、またそれまでに何か用があれば、何時でも彼の邸に来るようにと言われ」た¹⁴。また1653年2月3日に、江戸逗留が長引く商館長コイエットも「滞在が長くなり閉じ籠ってばかりでは不快であろうから、他所は許されぬゆえ彼の邸に遊びに来るように言われ」¹⁵た。なお、これらの記録の中で指摘される「彼の邸」が文京区小日向にあった屋敷とは限らない。下総高岡藩の上屋敷が現在の台東区上野3丁目、下屋敷が墨田区大平4丁目にあった¹⁶。

同様に井上家に招かれた西洋人の一人がオランダ東インド会社所属のスウェーデン人ウーロフ・エーリックソン・ヴィルマンである。彼は1651年8月19日に出島に上陸し、1652年初頭に将軍謁見のために上京した¹⁷。彼の日記には井上がなにかれと面倒を見てくれる様子が描かれている。2月11日にヴィルマンは井上の家を訪問し、その日のことを以下のように記す。「昼過ぎ、先日献上した地球儀と地図のことを教えるため、大目付役の家に招かれた。そのとき彼はラテン語、ポルトガル語、日本語の三カ国語辞典を見せてくれたが、これは一五九五年にポルトガル人が学林、つ

まりギムナジウムと印刷所を置いていた天草 Amacusa という、長崎から四マイルばかり離れた町で印刷せられたものであった」¹⁸。

ヴィルマンは『日本王国略史』でもこの辞典について触れている。「私の江戸滞在中、大目付役筑後殿〔井上〕の宅で、ラテン語、ポルトガル語、日本語の辞書を一冊入手したが、それは一五九五年に西国島 Saycock の天草で印刷されたものであった」¹⁹。

ここで記される井上が保管していた辞書とは『羅葡日対訳辞書』（ラテン語、ポルトガル語、日本語対訳辞書）のことで、これは 1595 年に天草で印刷された。この辞書をはじめ多くの書籍が 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけてイエズス会によって島原、天草、長崎で印刷され、こうした書籍はキリシタン版として知られている。

キリシタン版印刷のきっかけは、1582 年、当時日本のイエズス会を管轄していたアレッサンドロ・ヴァリニャーノの計画でローマに向けて出発した遣欧少年使節団にある。1590 年に彼らが帰国したさい、印刷機を持ち込んだ。ヴァリニャーノは布教活動や教育活動で使うテキストの必要性を認識していた。その後、印刷機を使って 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、様々な書籍が印刷された。例えば『どちらな・きりしたん』（1592）、『ヒイデスの導師』（1592）などのキリシタン関係の書籍、宣教師たちの日本語学習を主目的としたジョアン・ロドリゲスによる『日本大文典』（1604-8）などがある。また『イソップ物語』の翻訳『エソポのハブラス』（1593）が印刷され、これは西洋古典文学初の邦訳であった²⁰。

そして 1595 年に作成されたのが、『羅葡日対訳辞書』である。当時ヴァリニャーノの指導のもとイエズス会はセミナリヨなどの学校を運営していた。そこでは日本人の聖職者を育成する狙いもあり、教会で使用される言語であるラテン語の教育が始まっていた。この教育の中で、『羅葡日対訳辞書』が使われた。この辞書は当時ヨーロッパで出版されていた、アンブロジオ・カレピーノによるラテン語の辞書をもとにしたものである。日本語を学ぶ西洋人と、日本人のラテン語学習者のために、ラテン語、ポルトガル語、日本語という 3 つの言語の対訳辞書になっている²¹。

キリシタン版書籍は、キリシタンへの迫害が強まる中で衰退する。1614 年にキリシタン版印刷局（Jesuit press）は長崎からマカオに移され²²、書籍の多くは失われた。例えば 1626 年にイエズス会が所有していた書籍が日本で焼却されたことが報告されており、マカオに搬出された書籍もあったがそれらも虫に喰われたり、火災で消滅したことが言われている²³。結果、多くのキリシタン版書籍については現存が確認されていない²⁴。

キリシタン版書籍はこのような形で熄滅したが、その一冊である『羅葡日対訳辞書』をキリシタン迫害の急先鋒、井上正重が保管していた²⁵。このエピソードは、西洋文化の流入の断絶に勤しんだ井上自身が、其の実その重要性も認識していたことを暗示する。またこの辞書を保管することによって、結果として井上もラテン語受容継続に貢献したと言える。

シドッチと今村源右衛門

井上は宗門改役として在職 20 年の間に宗門糾明の諸方法を実行し、鍛え上げた。1658 年彼は老年ゆえに退いたが、後任者にもこうした諸方法や心得を引継ぎ、厳格な宗門改は続いた²⁶。キリシ

タンへの迫害と取り締まりは厳しく、密かに来日する西洋人宣教師はいなくなる。だが1708年10月、屋久島に外国人が上陸した。これがジョバンニ・バッティスタ・シドッチである。

彼は1668年シチリア島のパレルモで生まれ、のちに聖職者を志しローマに出て、やがて高い学識と能力を買われてローマ教皇庁の法律顧問につく。その後、教皇に願い出て宣教師となり、1704年9月にマニラに到着する。彼はマニラでの4年間で日本に関する情報を集め、日本を追放されたキリシタンの子孫たちから日本語を習った。そして1708年8月下旬日本へ出発し、同年10月10日か11日に屋久島に到着した。日本人を驚かせまいとの考えからか、髷を結び、武士の身なりで帯刀し、単身上陸したと言われる。しかしすぐに役人に報告され、捕まってしまう²⁷。

彼は捕捉されたのち、1708年11月に長崎に送られ取り調べを受けることになった。長崎奉行所がシドッチの尋問にあたらせたのが、今村源右衛門である²⁸。今村は1671年に長崎で生まれた²⁹。オランダ東インド会社の医師として1690年来日したケンペルの助手を務める³⁰。ケンペルは著書『日本誌』を通じて、ヨーロッパに日本を紹介したことで知られる。今村はケンペルからオランダ語を徹底的に習い込んだ³¹。1695年には出島でのオランダ語の試験に合格し、阿蘭陀通詞（オランダ語通訳）としてまず稽古通詞に任命された³²。のちに1707年には最上位の大通詞に昇進する³³。

1708年12月20日の最初の尋問では、今村の話すポルトガル語と日本語の一部をシドッチが理解することが明らかになった³⁴。翌21日、今村は保管していたラテン語辞書から多くの言葉をあらかじめ予習し、ポルトガル語と日本語も使用して尋問した。しかし結局シドッチの母国語はわからなかった³⁵。

だがラテン語が通じることは判明したのであろう。次のような尋問形式を取ることが検討された。オランダ商館にはアドリアーン・ダウという商務員補があり、彼はラテン語の素養があった³⁶。そこで幕府からシドッチへの質問条項を、ダウを始めとするオランダ商館員たちがラテン語で書き記し、それをシドッチに渡し彼に答えを書いてもらい、その答えをオランダ商館の人々が翻訳し、奉行に伝えるという形式をオランダ商館は提案している³⁷。結局12月25日に奉行側から書面でなく、対面での尋問が行われる決定が下された³⁸。

また日本人通詞たちにもラテン語の心得が必要だとされ、12月22日の商館長の日記にはダウにより今村源右衛門および二人の稽古通詞³⁹、さらに二人の日本人がラテン語を教授されることになったことが記されている⁴⁰。

なおダウのラテン語も万全とは言えなかった。今村らにラテン語を教授することを求められた際、オランダ商館長は次のように対応した。「その事（筆者註、ラテン語の教授）に我々は反対しなかったが、我々は、商務員補自身がそれ程（ラテン語が）堪能なわけではない。どの程度お役に立てるか疑問だと述べた」⁴¹。

新井白石も以下のように書いている。「オランダ人のうちで、以前シドッチの生国の言葉を学んだ者で、アドリアン＝ダウ（オランダ商館の商務員補）という者を、そのオランダ商館長ヤスフル＝ハン＝マンステアルという者が召し連れて出席した〔彼の生国の言葉というものは、ラテンの言語ということである〕。これによって、シドッチの日本に来た理由がわかり、その一部始終をしたためて、長崎奉行所の注進が幕府に届けられた〔私がのちに聞いたところによると、シドッチのオランダ人に対する礼儀は、ことにごうまんて、オランダ人はどのように思ったのであろうか、こ

とに怖れた様子があらわれていたということである。「私は彼国のことば（＝筆者註、ラテン語）⁴²を学んだといっても、六年で学業をやめてしまったので、ことごとくには通じにくく、その通じないところは、かえって彼が私に教えるようにしてのちに、そのことを理解したのです」とダウは言った⁴³。

さて12月30日の尋問には今村源右衛門らの通詞とオランダ商館の人々が参加した。幕府側は年齢や出身国、ならびに来日した際の船のことなどを尋ねる「24箇条」を準備した。これを「異国人江可相尋事」と呼ぶ。それをオランダ商館の人々に提出し、彼らがラテン語に訳した。シドッチからの回答も一部はラテン語であった。シドッチとの質疑応答をダウがまとめ⁴⁴、それを通詞名村八左衛門が日本語に翻訳し奉行たちに報告した⁴⁵。

江戸に送られるシドッチ

長崎奉行所はこの問答について江戸に伝達し⁴⁶、結局シドッチは江戸に送られることになった。幕府側はシドッチの江戸召喚にダウも同行させるよう指令を下したが、この指令に困惑した商館側は拒絶する。オランダ商館長が示したいいくつかの拒絶の理由のうち、一つがダウのラテン語能力の不足であった。商館長の懸念が1709年6月13日の『オランダ商館日記』に記されている。「次にダウがこの言語に未熟であるため（再三そのことが露呈したように）満足に役目を果たせるか私自身心配である。（中略）次の語学力の点に関しては彼等自身も奉行も限界は十分承知しており、人は与えられた権で船を漕ぐ他は術がない」⁴⁷。

最終的にこの拒絶は1709年8月4日に了承された⁴⁸。大通詞の今村源右衛門と二人の稽古通詞品川兵次郎と加福喜七郎がシドッチに同行することになり、彼らは長崎をたつ前10月24日にオランダ商館に挨拶に赴いている⁴⁹。

商館長は翌1710年の江戸参府の道中、大阪で今村一行に出会った。そのとき今村から伝え聞いたシドッチの消息が、同年3月3日の『オランダ商館日記』に記されている。「神父は（江戸に到着するや否や）2人の担当官に引き渡され、将軍に会うこと無く直接切支丹屋敷 Christian Jaskij すなわちキリスト教信者収容所 Christen gevangenhuijs に収監され、そこで彼は一生過ごす事になるであろうと」⁵⁰。

シドッチと新井白石の交流

こうしてシドッチは江戸に到着後、切支丹屋敷に収監された。この屋敷において、シドッチと幕府の重鎮新井白石の間で尋問を通じた交流が育まれる。新井はシドッチから得た知識をもとに、西洋について論じた『西洋紀聞』『采覧異言』などを執筆し、これらの書籍は日本における西洋文化受容史上の大きな節目となる。

新井が尋問担当に選ばれた経緯は『西洋紀聞』に残されている。彼はもともとの中に6代将軍となる徳川家宣に仕えており、学問を教授していた。1708年8月末にシドッチが屋久島に上陸し、

その後長崎で詮議を受けた。その年の12月6日まだ世継ぎの立場にあった家宣から、シドッチが上陸したこと、言葉が通じないことを告げられ、新井はそれに対して疑問を呈した。曰く、シドッチが日本語ができないのなら如何にして志を遂げるつもりだったのか理解し難い。ザビエル以降来日した宣教師たちには日本語に通じたものも多く、彼らは国外追放されたため日本語は海外へ伝わっており、シドッチも学んでいたはずだ。だがそれは古風な日本語なので、そのことを理解した上で審問すれば通じないということはないだろう。この新井の見解に、家宣も納得した⁵¹。

1709年2月19日に5代将軍綱吉が死去し、家宣が6代将軍として即位する。そして同年11月初め新井に次のような君命が下る。「去年の冬、大隈国にやって来て留まっている外国人が、近いうちに江戸にやって来るであろう。ついては、事の次第を尋問せよ」⁵²。任命理由は先の進言にあった。新井は、「あの外国人の来航の理由は、まだつまびらかではない。お前が以前お上に申し上げたことがあったので、お前に尋問させようと、お召しになったのである」と記している⁵³。

ついに11月22日、新井とシドッチが切支丹屋敷において初めて対面した。通詞は、長崎からシドッチに同行してきた今村、品川、加福である。新井は彼らが不慣れなラテン語の通訳をすることを理解した上で指示を出した。「オランダの言葉によって、イタリア地方の言葉を推測すれば、当然その七、八割は通じてしまうことであろう。しかしながら、これが公に報告するということになると、正確にその言語を学んでいないのを、ただ推測で申すのは適當ではない。(中略)あなたたちは私のために、その言語を通訳する任務なのだから、たとえ彼の言うことで、納得できないことがあっても、めいめいが、推測して思うところを私に言いなさい。私もまた、あなたたちの言うところが、正しく彼の申し述べるところの意味に合っているとして、すべてを信じて取り入れようとも思わない。であるから、あなたたちの推測にまちがいがあっても、それは罪ではないのだ」⁵⁴。

さらに新井は同席した奉行たちにも言った。「通訳たちは、もともと学んでいない言葉なのだから、たとえ通訳したところに誤りが多くても、おとがめなさらないようにしてください」⁵⁵。

尋問の際はラテン語だけでなく、日本語も使われた。尋問初日にシドッチが発した日本語について、新井は次のように述べる。「その質問に答える日本語を聞くと、予想していたほどには、わかりにくくはない。ただし彼の日本語は、わが国の畿内・山陰・九州・四国の方言がまじっていて、外国風の発音でいうので、それにちがいないと思われるものも、つい疑ってしまうことがある。彼もまた自分の言う日本語が、こちらに聞きとりにくいこともあろうかと思ったからか、かならず言葉を反復して言う。また、誤って伝えたことも少なくない。まして西洋方面の地名・人名に限っては、その地方でいうままに発音するので、それらのことは、十分に聞き尋ねて、正しい地名・人名などを判断した。また、通訳らは、オランダ語を学びそれに熟達していたために、古い慣習にひかれて、彼が言うとおりに通訳しえないことなどあると、シドッチはかえって通訳に教えて言うこともなどもあった」⁵⁶。

その後の尋問でもラテン語に苦心する通詞たちと鷹揚に対応するシドッチの様子が『西洋紀聞』には記されている。「また、通訳らがラテン語を、訛って通訳するのを、繰り返し教えて、習得できるとおおいにほめそやす。私が言ったことを聞いて、「通訳の人たちは、なまじオランダ語に習熟しておりますので、その習い覚えたくせを除くのにむずかしいところがあって、いまあなた様がおっしゃるとおりをそのままには通訳しておりません。それというのも、元来我方の語(=筆者註、ラテン語)⁵⁷に慣れていないせいです」などと言って、笑っていた」⁵⁸。

さて新井がシドッチに日本の風俗や言語は誰から学んだのかと問うと、フィリピンのルソン島に滞在していたおり日本人から学んだと彼は答え、さらに2冊の本を取り出した。新井はこの2冊の書名を『ヒイタサントールム』と『デキショナアリヨム』と記す⁵⁹。前者は、長崎の加津佐で1591年に印刷された『サントスの御作業の内抜書』だとされる⁶⁰。これはキリシタンの聖人について書かれたものであった。

後者に関しては、上で紹介した『羅葡日対訳辞書』(*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*)か、1603-4年にかけてイエズス会によって長崎で出版された『日葡辞書』(*Vocabulario da Lingoa de Iapam*)ではないかと推測される⁶¹。だが松村が指摘するように、新井は「デキショナアリヨム」と記しており、タイトルに *Dictionarium* という単語が含まれる『羅葡日対訳辞書』だと推定しうるだろう⁶²。また松村によると1632年にローマで刊行された、ディエゴ・コリヤード著、『羅西日対訳辞書』(*Dictionarium sive Thesauri Linguae Japonicae*)の表題にも *Dictionarium* が含まれており、この本が新井の言う『デキショナアリヨム』である可能性もある⁶³。『羅葡日対訳辞書』も『羅西日対訳辞書』もラテン語の辞書である。どちらかがシドッチが取り出した本であったなら、切支丹屋敷におけるシドッチの尋問では、対話の中でラテン語が使われただけでなく、そこで開かれた書籍にもラテン語の本があったと言えよう⁶⁴。

新井白石はシドッチとの交流を通じて得た知識をもとに、上中下巻から成る『西洋紀聞』を記した。上巻ではシドッチの来日した過程、尋問の様子、シドッチの人柄、そして彼が最終的に亡くなった事情が述べられている。そして中巻では世界の地理、ヨーロッパ諸国および世界各国の事情などが、下巻では主に新井とシドッチの対話形式でイエズス会やキリスト教のことが論じられた。

中巻ではラテン語がギリシャ語とヘブライ語と合わせて簡潔にまとめられているので、それも見とおこう。「ヨーロッパ地方の言語は、同一ではない。しかし、おおよそ次の三つの分類にまとめられる。一つは、ヘイペレイウス語（ヘブライ語）、二つにはラテン語、三つにはキリイキス、またはヘレッキス語（ギリシア語）ともいう。およそ重要な事柄を記すには、かならずこれらの語を用いる。（中略）ラテンというのは、昔の国の名。今はどこの地をいうのか、定かでない。キリイキス（ギリシア）も、またこれに同じ。そのうち、ラテン語にいたっては、ヨーロッパのどの語音にも通じるところがある。だから諸国のだれもが、このラテン語を学んでいる。また、ヨーロッパ諸国が用いるところの字体には二種類ある。一つはラテンの字（今、一般にローマ体）、二つにはイタリアの字（今、一般にイタリック体）がある。そのラテン字、イタリア字は、いわば漢字に楷書体・草書体があるのに似ている。その字母は、わずかに二十余字でありながら、一切の音を網羅している。文は簡潔で、意味広く、そのすぐれているのは天下にのこされた音がないというほどである」⁶⁵。

下巻ではアダムとイブ、ノアやモーゼの物語、およびイエスの誕生と死からキリスト教公認へといたる歴史などが記され、ローマ皇帝に関しても記述がある。アウグストゥスがイエスの使徒12人のうち2人を殺したこと、コンスタンティヌス帝がキリスト教の聖人の夢を見て、その後キリスト教を公認したことが紹介されている⁶⁶。

このように新井は西洋古代の歴史や言語についても解説した。蘭学勃興後、西洋古代に関する知識の日本への流入が始まるが、『西洋紀聞』はその先駆けであったと言えよう。

まとめ

本稿では、井上正重、シドッチ、今村源右衛門、ダウ、新井白石が日本のラテン語受容に携わってきた事情を見てきた。ダウを除く4人は切支丹屋敷に直接関わりを持った。切支丹屋敷を設立した井上はラテン語の辞書を保管し、シドッチ、今村、新井はこの屋敷でラテン語を通じて議論を交わした。また長崎でのシドッチの審問にラテン語で貢献し、今村源右衛門らにラテン語を教授したダウも、商館長の拒絶がなければシドッチ尋問のために江戸に来て、切支丹屋敷を訪問することになったであろう。このように切支丹屋敷は西洋人宣教師を収容し、キリスト教という西洋文化の流入をせき止めるというその本来の目的が遂行される中で、期せずしてラテン語という西洋文化の礎を支える言語を受容する舞台となったのである。

1714年にシドッチは亡くなり、切支丹屋敷には一人のキリシタンもいなくなった。1724年か25年ごろに火災が起き礎石を残すのみとなり、1792年に切支丹屋敷は廃される⁶⁷。だがラテン語受容のほうは、吉宗（在位1716-45）以降発展した蘭学の学者たちによって脈々と受け継がれていくのであった。

[参考文献表]

- 姉崎正治（1976）、『姉崎正治著作集 第三巻：切支丹伝道の興廃』、国書刊行会。
- 新井トシ（1973）、「巡察使ヴァリニャーノ師ときりしたん版の出版」、天理図書館（編）、『きりしたん版の研究』、天理大学出版部。
- 今村英明（2000）、「潜入宣教師シドッチの長崎における尋問—主にオランダ商館長日誌を通して—」、『日蘭学会会誌』、25巻、1号（通巻47号）、19-45頁。
- 今村英明（2007）、『オランダ商館日誌と今村英生・今村明生：日蘭貿易や洋学の発展に貢献した阿蘭陀通詞の記録』、ブックコム。
- 岩生成一（2005）、『日本の歴史14——鎖国』、第二版、中央公論新社。
- 海老沢有道（1977）、「天草キリシタン版書誌」、鶴田文史（編）、『天草学林 論考と資料集』、天草文化出版社、109-54頁。
- 遠藤周作・三浦朱門（1967）、『キリシタン時代の知識人』、日本経済新聞社。
- 大岡勝義・飯盛宏（訳）（1980）、『西洋紀聞』、教育社。
- 尾崎義（訳）・岩生成一（校訂）（1970）、『ヴィルマン日本滞在記』、雄松堂書店。
- ガイ、L・井出勝美（訳）（1983）、『キリシタン時代の典礼』、中央出版社。
- 片桐一男（1995）、『阿蘭陀通詞 今村源右衛門英生：外つ国の言葉をわがものとして』、丸善。
- 日下部行洋（編）（2011）、『古地図で歩く 江戸城・大名屋敷：歴史と地形で愉しむ江戸↔東京』、平凡社。
- ケンベル、E・今井正（訳）（1973）、『日本誌——日本の歴史と紀行——』、上巻、霞ヶ関出版。
- 篠田謙一（2018）、『江戸の骨は語る——蘇った宣教師シドッチのDNA』、岩波書店。
- 竹村覚（1964）、『キリシタン遺物の研究』、開文社。
- 谷真介（2015）、『江戸のキリシタン屋敷』、女子パウロ会。
- トルチヴィア、M・北代美和子（訳）・筒井砂（訳）・高祖敏明（監訳）（2017）『ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ——使命に殉じた禁教下最後の宣教師』、教文館。

長谷川一夫 (1969)、「井上筑後守政重の海外知識について」、『法政史学』、21 号、125-37 頁。

松村明 (校注) (1975)、「西洋紀聞」、松村明・尾藤正英・加藤周一 (編)、『日本思想体系 35 新井白石』、岩波書店、7-82、473-80 頁。

宮崎道生 (1968)、『新訂 西洋紀聞』、平凡社。

宮永考 (2013)、「東京 キリシタン屋敷の遺跡」、『社会志林』、60 巻、1 号、98-69 頁。

村上直次郎 (1956, 1958)、『長崎オランダ商館の日記』、第一輯、第三輯、岩波書店。

Blomberg, C. (2014) *The Journal of Olof Eriksson Willman: From His Voyage to the Dutch East Indies and Japan*, 1648-1654. Leiden.

Loureiro, R. M. (2006) 'Kirishitan Bunko: Alessandro Valignano and the Christian Press in Japan', *Revista de Cultura* 19: 134-53.

Taida, I. (2017) 'The earliest history of European language education in Japan: focusing on Latin education by Jesuit missionaries', *Classical Reception Journal* 9-4: 566-86.

[注]

* 本稿での『西洋紀聞』の引用については、大岡・飯盛 (1980) の現代語訳を使用した。また宮崎 (1968) と松村 (1975) の『西洋紀聞』も参照したので、対応する頁数を注記している。

- 1 例えば前野良沢 (1723-1803) はラテン語で書かれた画讃を翻訳し、『西洋画賛訳文稿』(1779) としてまとめた。また宇田川榕菴は、『羅甸語解』(1824) でおよそ 700 のラテン語の単語を収集している。
- 2 切支丹屋敷の地図、復元図、収容された人々などについては、宮永 (2013) が詳しい。
- 3 姉崎 (1976: 737)。
- 4 遠藤・三浦 (1967: 25)、長谷川 (1969: 125)。
- 5 篠田 (2018: 8-9)。この宗門改役というのは特別な官制というわけではなく、井上がそれまで扱ってきたことを広げ、それに権限を附したものである。姉崎 (1976: 737) を参照。
- 6 篠田 (2018: 9)。井上の略歴については、長谷川 (1969: 125-6) も参照。
- 7 篠田 (2018: 9)。
- 8 谷 (2015: 73)。
- 9 姉崎 (1976: 737)。
- 10 岩生 (2005: 403)。
- 11 遠藤・三浦 (1967: 26-7)。遠藤・三浦曰く、井上が元キリシタンだったという点については不明な点も多いが、1612 年以降は江戸の旗本、小姓組においてキリシタンが厳禁となったので、これ以降井上は少なくとも形式的にはキリシタンではありえなくなった。
- 12 井上の西洋情報の摂取については、長谷川 (1969) が詳しい。
- 13 長谷川 (1969: 126-9)。
- 14 村上 (1956: 143)、長谷川 (1969: 128)。
- 15 村上 (1958: 201)、長谷川 (1969: 128)。
- 16 日下部 (2011: 92)。
- 17 尾崎・岩生 (1970: 21-40)。
- 18 尾崎・岩生 (1970: 38)。
- 19 尾崎・岩生 (1970: 81)。
- 20 キリシタン版については、Taida (2017: 573-8) を参照。
- 21 Taida (2017: 574)。

- 22 Loureiro (2006: 150)、新井 (1973: 45)。
- 23 ガイ・井出 (1983: 206)。新井 (1973: 46) によると 1627 年 7 月 23 日には書物の山が長崎で焼かれた。Loureiro (2006: 149) も参照。
- 24 海老沢 (1977: 110) によれば 1591 年から 1597 年にかけて天草の河内浦でキリシタンたちによって書籍が印刷されたが、現存するものは断簡を含め 15 点で、出版を文献的に推知しうるものが 29 点である。また現存が確認される『エソポのハプラス』は、大英図書館の 1 冊のみであることも知られている。
- 25 Blomberg (2014: 104) によれば、井上が所有していた『羅葡日対訳辞書』は、棄教した宣教師であり、井上の協力者でもあったクリストヴァン・フェレイラ (日本名、沢野忠庵) が所有していたものではないかと推測される。
- 26 姉崎 (1976: 737-9)。
- 27 シドッチの経歴については、篠田 (2018: 12-3) を参照。日本に入国し捕われるまでのシドッチに関して、より詳しい記載についてはトルチヴィア・北代等 (2019: 90-105) を参照。
- 28 片桐 (1995: 92)。
- 29 片桐 (1995: 1)。
- 30 片桐 (1995: 13, 19-20)。
- 31 ケンペル・今井 (1973: 77)、片桐 (1995: 36-7)。ケンペルの『日本誌』の序文に、彼が日本で知り合ったある青年のことが記されている。「私が非常に学識のある一青年と知り合い、私の目的を達成し、日本の事物を記述する上にすこぶる豊富な収穫を齎しうる適材を得たことは、全く僥倖であった。この青年は、24 歳前後の知識欲に燃えた学生であり、日本やシナの文籍に通じ、私が出島入りをした直後、私から薬物学を学ぶために従僕として与えられたのであった。(中略) 私は、この抜け目のない青年に直ちにオランダ語を文法的に教え込んだ (かれがオランダ語を知らないと、私はかれと意見を疎通することができなかった)。幸いにかれは早くもその年の終りにはオランダ語で一応文章を書き、日本の通詞といわれる連中が足許にも及ばぬほどよく話せるようになった」(ケンペル・今井 [1973: 77])。この青年の名前をケンペルは明らかにしておらず、『日本誌』の訳者である今井正もその人物を特定できていない (ケンペル・今井 [1973: 79])。だが 1990 年サントリー美術館で開催された「ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展」に際して大英図書館から出陳された資料から、その人物が今村源右衛門であることが判明した (片桐 [1995: 20])。
- 32 片桐 (1995: 77-80)。
- 33 片桐 (1995: 84)。阿蘭陀通詞の職階は、基本的には阿蘭陀大通詞、阿蘭陀小通詞、阿蘭陀稽古通詞に分けられる。片桐 (1995: 7) 参照。
- 34 今村 (2007: 58)。
- 35 今村 (2007: 58)。
- 36 今村 (2007: 58)。
- 37 今村 (2007: 60)。
- 38 今村 (2007: 60)。
- 39 二人の稽古通詞とは加福喜七郎と品川兵次郎で、彼らは翌年 (1709 年)、今村と共にシドッチに付き添って江戸にのぼった。片桐 (1995: 96)、今村 (2007: 60) 参照。
- 40 今村 (2007: 60)、片桐 (1995: 95)。
- 41 今村 (2007: 60)。
- 42 大岡・飯盛 (1980: 88) は「彼国のことば」を「イタリア語」と訳しているが、文脈上ラテン語が適切であろう。ダウが通訳で使った言葉として焦点が当てられているのはラテン語であるため、本箇所もラテン語と解すべきである。

- 43 大岡・飯盛（1980: 87-8）。宮崎（1968: 24）と松村（1975: 25）も参照。
- 44 今村（2007: 61）。
- 45 今村（2007: 63）。シドッチの長崎での尋問の様子は、今村（2000: 19-28）にまとめられている。
- 46 今村（2007: 64）。
- 47 今村（2007: 65）。
- 48 今村（2007: 66）。
- 49 今村（2007: 66）。
- 50 今村（2007: 66-7）。
- 51 大岡・飯盛（1980: 52-4）。宮崎（1968: 3-4）と松村（1975: 8-9）も参照。
- 52 大岡・飯盛（1980: 55）。宮崎（1968: 5）と松村（1975: 9）も参照。
- 53 大岡・飯盛（1980: 55）。新井がシドッチの尋問を担当することになった経緯については、『采覧異言』の序文（宮崎 [1968: 311-2]）および片桐（1995: 115）も参照。
- 54 大岡・飯盛（1980: 57-8）。宮崎（1968: 6-7）と松村（1975: 11）も参照。
- 55 大岡・飯盛（1980: 58）。宮崎（1968: 7）と松村（1975: 11）も参照。
- 56 大岡・飯盛（1980: 61）。宮崎（1968: 8-9）と松村（1975: 12-3）も参照。
- 57 片桐（1995: 119）に従い、この「我方の語」はラテン語だと判断する。大岡・飯盛（1980: 73）は「わがイタリア語」と訳すが、文脈上もラテン語の方が適切である。
- 58 大岡・飯盛（1980: 73）。宮崎（1968: 15）と松村（1975: 18）も参照。
- 59 大岡・飯盛（1980: 156）。宮崎（1968: 68）と松村（1975: 58）も参照。
- 60 竹村（1964: 274）。
- 61 竹村（1964: 274）。
- 62 松村（1975: 479）。
- 63 松村（1975: 479）。
- 64 新井の言う『ヒイタサントールム』と『デキショナアリヨム』については、そのほかに宮崎（1968: 157）と大岡・飯盛（1980: 223-4）を参照。宮永（2013: 86-85）はこの『デキショナアリヨム』について、ディエゴ・コリャド著、『日本文典』（Diego Collado, *Ars Grammaticae Iaponicae Linguae*）、ローマ、1630 だと論じているが、特に根拠を示しているわけではない。
- 65 大岡・飯盛（1980: 118-20）。宮崎（1968: 44-5）と松村（1975: 39）も参照。
- 66 大岡・飯盛（1980: 184-97）。宮崎（1968: 83-91）と松村（1975: 70-76）も参照。
- 67 宮永（2013: 83）。